

## 大伴家持と漢語

### はじめに

講演では、大伴家持の越中守時代の初めての春、天平十年（七四七）二月の、重病の床に臥して、部下であり大伴の一族である越中掾大伴池主に贈った「悲歌二首」（巻十七・三九六五、六）に歌われた「春の花」から始めた。

家持には天平五年（七三三）、歌人としての出発とも言える「初月歌」（巻六・九九四）がある。三日月を女人の眉に喩える漢詩の手法を用いた作品であった。題詞に漢語「初月」とあり、歌中には「若月」と記されている。「若月」は柿本人麻呂歌集の歌にある表記であった。また青春時代の自然詠、詠物歌に、題詞に漢語「晚蟬」を用いて、歌中には「日晚」と記されている。ひぐらしを詠んだ歌は万葉集に九首あるが、題詞に「晚蟬」と記したのは家持のこの歌

### 小野 寛

のみで、ここに漢語の受容を見たのは土屋文明「私注」であったが、漢語の用例を博搜してその影響を論じたのは小島憲之氏であった。また青春の恋の相聞贈答歌に中国の「遊仙窟」の明らかな影響を指摘されるものがあることは今更言うまでもないだろう。

家持が越中守に任ぜられたのは天平十八年、二十九歳であった。そしてその年の暮れ頃からであろうか、翌天平十九年春三月まで病いの床に臥したのである。万葉集には天平十八年十一月の作以降天平十九年二月二十日まで歌の記録がない。その二月二十日、家持は病いに臥す悲しみをのべる長歌と反歌二首（巻十七・三九六二―三九六四）を記している。歌によればあやうく黄泉路につくところだったが、ようやく快方に向かい、今、五十七句もの立派な長歌を作るほどに体力も気力も回復して来たのだった。その題詞は、

忽沈「枉疾」、殆臨「泉路」。仍作「歌詞」、以申「悲緒」一首

とあつて、冒頭の「忽沈枉疾」の句は、続いて大伴池主に贈った書翰の書き出しに重ねて用いられ、家持としては己れの心にびつたりの詞句であつたのだらう。

「枉疾」は未だ漢籍に見当たらない。例えば「枉病」などもない。「枉」は、まがる、まげる、無実の罪に引きおとすなどの意で、「枉害」「枉死」などとある。諸本に異表記も多く、「略解」など誤字説を出すものも多い。<sup>(注3)</sup>「枉疾」と対になっている「泉路」は「文選」や「芸文類聚」に見えないが、杜甫には「送鄭虔一詩」に「便与先生一応永訣」、九重泉路尽「交期」とある。

長歌は山上憶良の「日本挽歌」(巻五・七九四)の詞句をほとんどそのまま承けたところがあり、また憶良の「世間の住り難きを哀しふる歌」(巻五・八〇四)によつた句もあり、わが身の病いを歌つた憶良の歌を手本の一つにしなから、自らの病いを見つめ、生命を考え、世間を思い、歌を作ることによつて悲しみの心を晴らそうとしたのであつた。病中、病床で家持が繙いた書卷の中に憶良の歌巻があつたとすれば、そのほかにいわゆる漢籍が、「文選」や「芸文類聚」があつたに違いない。病いもまた中国文学では重要なテーマの一つとして追求されていた。その「病臥詩」のい

つくかを、家持は読んだだらう。この病臥の長歌はそうして生まれた。<sup>(注4)</sup>

ここに、家持の漢籍へのハードルを一つも二つも越えて、漢籍への親昵をはつきりと深めたと言えるだらう。

九日後、二十九日、家持は池主に「忽沈「枉疾」」で始まる漢文の書翰と「悲歌二首」を贈り、これを契機に池主との漢文の競作が始まり、七言律詩の応酬で終つたのは三月五日であつた。家持はなお「臥病作之」とあつた。

一

三月五日で家持と池主の漢詩文と歌の贈答の記録は途絶え、三月二十日まで歌の記録もない。三月五日のあと間もなく家持の病気は本復して、溜りに溜つたであらう国守の政務の処理に追われたのではないか。

三月二十日の夜半、都に残して来た妻への恋情が起つて、その思いを長歌一首、反歌四首に歌つた。半月ぶりの歌である。

恋情を述ぶる歌一首并せて短歌

妹も吾も 心は同じ たぐへれど いやなつかしく  
相見れば 常初花に 心ぐし めぐしもなしに はし  
けやし 吾が奥妻 大君の 命恐み あしひきの 山  
越え野行き 天離る 鄙治めにと 別れ来し その日

の極み あらたまの 年ゆきがへり 春花の うつろ  
 ふまでに 相見ねば いたもすべなみ 敷袴の 袖反  
 しつつ 寝る夜落ちず 夢には見れど うつつにし  
 直にあらねば 恋しけく 千重に積もりぬ 近くあら  
 ば 歸りにだにも うち行きて 妹が手枕 さし交へ  
 て 寝ても来ましを 玉梓の 道はし遠く 閑さへに  
 隔りてあれこそ よしゑやし よしはあらむそ ほと  
 とぎす 来鳴かむ月に いつしかも 早くなりなむ  
 卯の花の にほへる山を 外のみも ふり放け見つつ  
 近江路に い行き乗り立ち あをによし 奈良の吾家  
 に ぬえ鳥の うら嘆けしつ つ 下恋に 思ひうらぶ  
 れ 門に立ち 夕占問ひつ つ 吾を待つと 寝すらむ  
 妹を 逢ひて早見む (卷十七・三九七八)  
 あらたまの年かへるまで相見ねば心もしのに思ほゆる  
 かも (同・三九七九)  
 ぬばたまの夢にはもとな相見れど直にあらねば恋ひ止  
 まずけり (同・三九八〇)  
 あしひきの山きへなりて遠けども心し行けば夢に見え  
 けり (同・三九八一)  
 春花のうつろふまでに相見ねば月日数みつつ妹待つら  
 むそ (同・三九八二)

右、三月二十日夜裏に、忽ちに恋情を起して作

る。大伴宿禰家持

家持独自の用法の「春花」の例が、長歌と反歌第四首と  
 にある。病中詠の「春の花」を、人麻呂に始まる準枕詞「春  
 花の」を意識しながら「春花の」に歌ったものだろう。<sup>(注1)</sup>

妻も私も同じ気持で、寄り添っていてもなお慕わしく、  
 見交わせばなお心ひかれる、可愛い、私の大事な妻を、国  
 守という任務のために遠く別れて来たその日を限りに「あ  
 らたまの年ゆきがへり」、春花の散る今日まで逢っていない  
 と歌う。原文「登之由吉我敵利」とある「年ゆきがへり」  
 は、万葉集に初見の句である。天平十八年七月に妻に別れ  
 て、今、天平十九年の春三月である。年改まって、新しい  
 年が来た。それを「年ゆきがへり」という例はないのであ  
 る。それは「ゆきかはる」という。

玉の緒のうつし心や 年月乃行易及 妹に逢はざら  
 む (卷十一・二七九二)

作者未詳歌である。「年月の行きかはる」とは、古い年や  
 月が行き過ぎて新しい年や月に変るのである。

「ゆきがへり」は、「大納言藤原家の、入唐使らに餞する  
 宴の日の歌一首」と題して、

天雲の 行還奈牟 ものゆゑに思ひそ吾がする別れ悲  
 しみ (卷十九・四二四二)

とある。天雲が流れて行ってはまた帰って来るのをいうの

である。「年ゆきがへり」はこれではない。

年が過ぎ、改まることは、次のように歌う。

み立たしの島をも家と住む鳥も荒びな行きそ

年替としかはるまで左右（巻二・一八〇）

日並皇子の宮の舍人等の働傷作歌の一首である。皇子の殯宮儀礼が没後、年を越してほぼ一年にわたって行われたらしいことを知る。それを家持は、この恋情の歌の反歌第一首に、明らかに長歌の「あらたまの年ゆきがへり 春花のうつろふまでに相見ねば…」をうけて、「あらたまの年かへるまで相見ねば」と歌っている。「年かへるまで」も集中唯一例、家持の独自句である。

年が過ぎ、年が改まる（替る）ことを今までに例のない「年ゆきがへり」と歌い、「年かはるまで」とせずに「年かへるまで」と歌った家持の、その発想の種は何であったか。先学はこれに全く触れていない。契沖にも一言もない。鴻巣盛広「全釈」は「年去き還り。年が去り改まって」と言うが、年がゆき「還り」とは何か。年が去り改まることを年が「還る」と言えるだろうか。窪田空穂『評釈』は「あらたまの年が過ぎて行き、また立ち返って来て。年が変わって」とある。年は過ぎて行くが、年が変ることをまた年が立ち返って来ると言うのだろうか。武田祐吉『全註釈』も、「年が行って帰って、翌年になったことをいう」と言

う。

家持は天平勝宝元年（七四九）閏五月二十七日、越中国守館に帰任した部下、越中掾久米広繩を迎えての詩酒の宴の歌に、

大君の 任まかのまにまに 取り持ちて 仕ふる国の 年  
の内の 事かたね持ち 玉梓の 道に出で立ち 岩根  
踏み 山越え野行き 都辺に 参まるしわが背を あら  
たまの 等之由吉我弊理 月重ね 見ぬ日さまねみ  
恋ふるそら 安くしあらねば…（巻十八・四一一六）  
とも歌っている。久米広繩は天平二十年（七四八）に朝集使として上京し、年改まって天平勝宝元年閏五月まで長い留守であった。それを「あらたまの年ゆきがへり、月重ね見ぬ日さまねみ」と歌った。そのあと家持の歌に次のように見える。

天平勝宝元年七月七日の「七夕歌」に、

…うつせみの 世の人我も ここをしも あやに奇し  
み 往更 年のはごとに 天の原 ふり放さけ見つつ  
言ひ継ぎにすれ（巻十八・四一二五）

天平勝宝二年三月八日、「白き大鷹を詠む歌」に、

あしひきの 山坂越えて 去更 年の緒長く しなざ  
かる 越にし住めば…（巻十九・四一五四）

この「往更年」「去更年」は集中この二例しかない。「ゆ

きかはるとし」と訓んで、これも家持の独自句である。しかしこの二例、旧訓「ゆきかへる」で、第二例白き大鷹詠の「去更」を類聚古集に「ユキカハル」の異訓が付記されているのみである。第一例七夕歌の「往更」は「略解」に初めて「ゆきかはる」と訓み、「古義」も「ゆきかはる」で、共に説明はない。第二例白き大鷹詠の「去更」は真淵「考」に「ユキカハル」と改訓されているが、「略解」は旧訓通り「ゆきかへる」で第一例歌と不統一で、「古義」は「ゆきかはる」とし、これも説明はない。以来二例とも「ゆきかはる」が定訓になっている。時が過ぎ行き、年が「更る」のである。

「白き大鷹を詠む歌」と恐らく同日の、「鶴を潜くる歌」に、

あらたまの 年往更 春されば 花のみにほふ…（巻十九・四一五六）

がある。この「年往更」は旧訓「としゆきかへり」で、元暦校本・類聚古集・京都大学本に「カハリ」の異訓が付記されている。これも「古義」以来「としゆきかはり」と訓んでいるが、昭和三十八年塙書房版『万葉集』が「としゆきがへり」と旧訓を復活させ、同四十七年桜楓社版も「としゆきがへり」と訓み、塙本にならう小学館全集本がこの訓によっているが、これはこの三本のみで、その後の新潮

集成本・講談社文庫本なども「としゆきかはり」である。「往更」「去更」三例、家持のみの句である。他に「行易」はある。

そして、天平宝字元年（七五七）十二月十八日、右の最後の例から七年半を経て、大監物三形王宅の宴での家持の歌に、

あらたまの等之由伎我敝理 春立たばまづわがやどに  
うぐひすは鳴け（巻二十・四四九〇）

とある。宴席では春を待ち望む歌が続いた。時は十二月十八日、あと十数日で今年は終り、年が改まる。これを「あらたまの年ゆきがへり春立たば」と歌った。家持の「年ゆきがへり」の第三例である。

家持の「年ゆきがへり」の三例はともに仮名書き例であった。その訓みに間違いはない。意味するところもまた明らかである。年が過ぎ行き、年が改まるのである。年が変わるのである。年が返ったり、帰ったりはしないのである。「孔子家語」（致志）に「往而不来者年也」とある。

家持の独自句「年ゆきがへり」の「かへり」は「更」ではないか。家持は「年」が「往」ことも漢籍に学んでいる。「年往」は、

年往信勤矢、時来亮急弦。（陸士衡「長歌行」）  
年往歎流、厭来情舍。（謝靈運「曇隆法師誄」）

年。往誠思勞、路遠關三音形。(顏延之「秋胡詩」)

などとある。そして「更新」「更改」の「更」の意の如く、おのずから変わるのではなく、年が年を更える意で「年ゆきがへり」という句を創造したのでらう。

卷19・四弄 あらたまの年往更 春されば花のみにほ

ふ…

卷20・四弄 あらたまの年ゆきがへり 春立たばまづ

わがやどにうぐひすは鳴け

右の「年往更」は、旧訓に帰る埧本・桜楓本・小学館全集本の訓み「としゆきがへり」こそ採らるべき訓だと思われる。

## 二

家持の越中守時代四年目の春、天平勝宝二年(七五〇)

三月一日の夕べから三日早朝までの間に、家持は十二首の秀作を記録している。

天平勝宝二年三日一日の暮に、春苑の桃李の花を

眺矚して作る二首

春苑紅にはふ桃花下照る道に出立つ嬌婦

(卷十八・四一三九)

この歌から始まるのであるが、この初句「春苑」は題詞にあり、「はるのその」の句は万葉集中に他に見られない。

これも家持の独自句であり、漢語「春苑」の翻訳語だらうと言われている。

その第六、七首に当たる、三月二日の作が次のように記されている。

帰雁を見る歌二首

燕来る時になりぬと雁がねは本郷偲ひつつ雲隠り鳴く

(卷十九・四一四四)

春設けてかく帰るとも秋風に黄葉の山を越え来ざらめ

や 一に云はく、春されば帰るこの雁(同・四一四五)

春三月二日、越中の空を北へ帰る雁の鳴き行くのを見て、故郷を慕って長途の旅に向かう雁の心に感じたのである。

小島憲之氏は、この春の「帰雁」を歌った歌は、万葉集には家持の右の二首の他には一首しかなく、季節歌の卷、

卷八と卷十に限って雁の歌を摘出してみると、秋の来雁は五十首近くも見えるが、その反対に春の帰雁の歌は皆無であって、家持の二首は実に珍重すべきだと言う。

その他の一首とは、神龜四年(七二七)正月作という長歌で、

ま葛延ふ 春日の山は うち靡く 春さりゆくと 山  
の上に 霞たなびき 高田に 鶯鳴きぬ ものふの  
八十伴の男は 雁がねの 来継ぐこのころ かく継ぎ  
て 常にありせば 友並めて 遊ばむものを 馬並め

て 行かまし里を 待ちがてに わがする春を：（巻六・九四八）

とある。左注によれば、皇族や諸臣の子弟たちの侍従や内舎人たちが宮中の警備を怠つて春日野に出て打毬に興じていて罰を受け、授刀寮に軟禁されて外出を禁止されたので、その憤懣を歌に託したものだという。

この「雁がねの来継ぐ」は正月の歌であるから、雁の渡り来る時というのは間違ひであるという説に対して『代匠記』は、「是ハ唯友タチノ思ヒアヘルヲ雁ニ寄テ云ナリ。時分ニ抱ハルヘカラス」とある。真淵『考』も、「鴈は秋来春帰るものにあれば、来継グコノコロ：、てふ言の序に置き、鴈は来るよりならば飛もの故、来継ならびといひて、又常にあらぬもて身のいましめられ居に譬り」と、皆人の「来継ぐこのころ」の序とした。『略解』に「さて意は宣長のいへるごとく、鴈がねのは、来つぎといはん序にて：」とあるによれば宣長も同じく序と解していたらしい。それに対して井上通泰『新考』には「帰雁なり」とある。これは武田祐吉『全註釈』に「雁のくるのは、秋であるのに、来継グコノ頃というは、不審であるが、帰る雁の次々と来るをいうと解せられている」ということになるのだろうか。

岩波古典大系本補注には、「来継ぐこのころ」と訓んで、

「こう訓んだ際、春なのに、雁が来継ぐのはおかしいということがある。しかし、『来』という動詞は、行くという意味の場合がある。ここもそれで、続いて行くの意ととればよい」とある。「来」が問題である。講談社文庫本には「春、雁は帰るので実景ではない。雁の鳴きつぐごとく春の景物が『来つぐ』と続く」とある。この一首を「帰雁」を歌う例と決定できない。家持の二首はいよいよ貴重品である。

小島氏は『懐風藻』にも春の帰雁を詠んだ詩はないことを指摘されている。

ただ、家持の父、大宰帥大伴旅人の官邸で催された梅花の宴の歌三十二首（巻五・八一五―八四六）に添えた漢文の序の一節に、

庭舞<sub>二</sub>新蝶<sub>一</sub>、空帰<sub>二</sub>故鴈<sub>一</sub>。

とある。天平二年（七三〇）正月十三日、太陽暦で二月五日、筑紫大宰府の空には昨秋飛来した古なじみの雁が、そろそろ北へ帰るべく集まり始めていたのだろう。まだ春早いのには蝶が迷い舞っていたのだろう。「新蝶」と「故雁」の対は見事である。

また小島氏の指摘にある、家持の天平十九年春三月五日の病中作の七言律詩に、

来燕銜<sub>レ</sub>泥<sub>レ</sub>賀<sub>レ</sub>字入

婦。鴻引<sub>レ</sub>蘆<sub>レ</sub>迤<sub>レ</sub>赴<sub>レ</sub>瀛

とある。「婦鴻」は「婦雁」に同じく、帰り行く春の雁をいい、家持は「婦鴻」を「来燕」と対に歌った。天平勝宝二年の「婦雁を見る歌二首」の先鞭は、天平十九年三月のこの病臥詩の「婦鴻」にあつたのである。「婦鴻」の語を家持はどこから学んだらうか。「婦鴻」も「婦雁」も「懷風藻」にないのである。「婦鴻」は「文選」の詩篇に、

目<sub>二</sub>送婦鴻<sub>一</sub> 手揮<sub>二</sub>五絃<sub>一</sub>（嵇叔夜「贈<sub>二</sub>秀才入<sub>レ</sub>軍五首<sub>一</sub>」の第四）

願<sub>レ</sub>仮<sub>二</sub>婦鴻翼<sub>一</sub> 翻<sub>レ</sub>飛遊<sub>二</sub>江汜<sub>一</sub>（陸士衡「為<sub>二</sub>顧彦先<sub>一</sub>贈<sub>レ</sub>婦二首<sub>一</sub>」の第一）

思<sub>レ</sub>駕<sub>二</sub>婦鴻羽<sub>一</sub> 比<sub>レ</sub>翼雙飛翰<sub>上</sub>（陸士衡「擬<sub>二</sub>古詩<sub>一</sub>十二首」の中の「擬<sub>二</sub>西北有<sub>二</sub>高樓<sub>一</sub>」）

などとある。ここに手本があつた。雁といえば秋空高く飛来する雁という認識が一般であるのに対して、家持の春の詩の「婦鴻」は北へ帰る雁である。「婦鴻」は家持のみが持つてゐる春の景物であつた。それが天平勝宝二年の春三月にも「帰る雁」を見のがさなかつた。遙か北方の故郷へ帰る雁の心に共感したのである。

題詞の「婦雁」も唯一例である。小島憲之氏は「春の花をよそに北方へ帰る雁の詩は、わが上代の詩歌とは違つて、六朝以来多くの例をみる」として、家持の目に触れたと推

定できる漢詩の例を『芸文類聚』から挙げ、また初唐詩を挙げ、「婦雁」の詩は例にこと欠かないと言つ。家持の稀少な例は、こうした漢詩から生まれた発想によるのだらう。私なりに、家持の目に触れたに違ひない「文選」の「婦雁（鴈）」の例を挙げてみよう。

若其厨膳、則有<sub>二</sub>華鄉重柜、滢阜香杭<sub>一</sub>。

婦鴈鳴鷄、黃稻<sub>魚</sub>魚、以為<sub>二</sub>芍藥<sub>一</sub>。（張平子「南都賦」）

南都は洛陽の都の南、河南省南陽県にあり、東漢の光武帝の育つたところ、張衡（平子）の出身地でもある。その南都の讚歌で、豊かな恵まれた物産、豪華な生活などを歌う。その食膳にあるものを歌い、「婦鴈・鳴鷄・黃稻・魚魚」で味を調えるという。この「婦雁」は食膳に供するもので、北に帰る雁に限らない。この「婦」は渡り鳥が季節によって去来することをいう。

「文選」の詩篇には、

烈烈冬日 肅肅淒風 潜鱗在<sub>レ</sub>淵 婦雁載<sub>軒</sub>（王仲宣

「贈<sub>二</sub>蔡子篤<sub>一</sub>詩」）

婦雁映<sub>二</sub>蘭苕<sub>一</sub> 游魚動<sub>二</sub>四波<sub>一</sub> 鳴蟬厲<sub>二</sub>寒音<sub>一</sub> 時菊

耀<sub>二</sub>秋華<sub>一</sub>（潘安仁「河陽泉作二首<sub>一</sub>」の第二）

歲暮涼風發 昊天肅明明……繡繡婦鴈集 嘒嘒寒蟬鳴

（陸士衡「擬<sub>二</sub>古詩<sub>一</sub>十二首」の中の「擬<sub>二</sub>明月皎夜光<sub>一</sub>」）

とある。王仲宣の「贈<sub>二</sub>蔡子篤<sub>一</sub>詩」は烈々たる冬の日で、



身を切るような冷たい風が吹いている。魚は皆淵に潜み、「帰雁」のみ空を飛んでいるという。春の「帰雁」ではなく、おそらく冬空をねぐらに帰る雁であろう。潘岳(安仁)の「河陽泉作」は潘岳が河陽泉令になった時の作である。後に寒そうに鳴く蟬と今照り輝く菊の花が歌われているように、時は秋である。この「帰雁」もねぐらに帰る雁で、次句の「游魚」と対になっている。陸機(士衡)の「擬明月皎夜光」詩も「涼風」「明月」は秋の季節である。「帰鴈」の前の句に「蟋蟀吟三戸庭」とあり、きりぎりすが鳴き、寒々と蟬が鳴いている。翻々として「帰鴈」が集まるのも同じだろう。

漢籍の「帰雁」は必ずしも、春、北方に帰る雁ではない。しかし家持が「春設けてかく帰るとも」と歌い、また別伝に「春されば帰るこの雁」と歌うならば、題詞の「帰雁」は家持の漢詩でなじんだ表現として、その筆先に自ずから浮かんで来るだろう。

### 三

家持の傑作と誰もが認め、家持の代表作と誰もが推すのは、「春愁絶唱」と称せられる天平勝宝五年(七五三)二月二十三日の二首と二十五日の一首であるが、その二十五日の一首は次のようにある。

#### 二十五日に作る歌一首

うらうらに照れる春日にひばり上がり心悲しもひとり  
し思へば(巻十九・四二九二)

春日遅々、鶺鴒正啼。悽惻之意、非レ歌難レ撥  
耳。仍作此歌、式展<sub>二</sub>締緒<sub>一</sub>。……

「うらうらに照れる春日」は左注にある「春日遅々」である。「うらうらに」をただうららかにと解してはならない。春の太陽がのんびりと動いて、ゆったりと照らしている。暮れそうでいてなかなか暮れない、暮れなずむ「遅き日」である。「遅日」ともいう。『類聚名義抄』に「遅々ウラウラ」とある。その春の太陽に照らされて、その春の日の中へ吸い込まれるように、ひばりがさえずりながら大空にのぼって行く。

左注の「鶺鴒正に啼く」はひばりのことではない。「鶺鴒」はこうらいうぐいすといひ、うぐいすとも全く別種の鳥である。うぐいすともひばりともよく似た鳥で、美しいさえずりを聞かせてくれる。ひばりのさえずり上るのに当てたものである。春ののどかな空に小鳥が明るくさえずっている風景なのである。

その明るいどかな風景の中にあつて、「心悲しも」といふ。左注には「悽惻の意、歌にあらずは撥<sub>レ</sub>難<sub>レ</sub>きのみ」といふ。「悽惻の意」とは悲しみ痛む心、それを「心悲しも」

と歌った。「歌」でなければ晴らせないという「悲しみ」である。

「心悲しもひとりし思へば」と歌った。「悲しみ」の中味には小稿では触れないが、家持は「ひとり思ふ」が故に「心悲し」いのだという。「ひとり思ふ」と歌ったのは家持に一例のみである。このことは川口常孝氏「家持覚書―『独』の世界―」に論じられ、「ひとり」は万葉集に七十四例あり、その中で圧倒的に多いのが「ひとり寝」で三十五例、続いて「ひとり居り」七例、「ひとり見る」四例、「ひとり越ゆ」三例、「ひとり行く」二例、「ひとり聞く」二例など、すべて所作・所為にかかわる動詞について、思惟・思索にかかわる動詞は家持のこの「ひとりし思へば」の一例のみで、「家持だけが『ひとり思ふ』世界を切りひらいていたのである」という。「ひとりし思へば」はそれほど重い言葉なのである。

思惟は窮極のところ一人のものである。その孤独でしかありえない思惟の世界を、家持は自覚し、そして歌った。山本健吉氏はこれは家持の絶唱だと言い、「このような歌の境地は、家持以前にも、家持以後にもなかった。彼一人で、ぼつりと絶えてしまった」と言い、西行や心敬や芭蕉のような世捨人たちがわずかに、この境地を観念的に知っていたようだと述べている。

家持以外に誰も自覚したことのない「ひとり思ふ」ことつまり「ひとりうれふ」とか「ひとり悲しみに沈む」とかいうことを、家持はやはり漢詩文から知ったのではないだろうか。勿論家持の独自の繊細鋭敏な感受性がおのずから求めたのであっただろうけれど。

『芸文類聚』には「愁詩」また「愁賦」が多いが、例えば、

傷<sub>二</sub>時俗之趨悵險<sub>一</sub> 独惆悵而長愁

感<sub>二</sub>龍鷺而匿<sub>レ</sub>迹 如<sub>三</sub>吾身之不<sub>レ</sub>留

竄<sub>二</sub>江介<sub>レ</sub>之曠野 独<sub>レ</sub>眇眇而汎<sub>レ</sub>舟

思<sub>二</sub>孤客之可<sub>レ</sub>悲<sub>一</sub>…(魏陳王曹植「九愁賦」)

など、独り思う姿を見ることができ、また「文選」の詩篇にも独り思うところを見ることができ、

臨<sub>レ</sub>川哀<sub>二</sub>年邁<sub>一</sub> 撫<sub>レ</sub>心独<sub>レ</sub>悲<sub>レ</sub>吒(晋郭景純「遊仙詩」)

俗世間を狭しとして、山林に入って道を楽しみたいという詩で、仙を学びたいが成らず、ただ川に臨んで年の過ぎ行くのを悲しみ、胸を打って独りで悲しみ嘆くばかりだという。

徘徊将何見 憂<sub>二</sub>思<sub>レ</sub>独<sub>レ</sub>傷<sub>レ</sub>心(魏阮嗣宗「詠懷詩」)

阮籍の彪大な詠懷詩の連作の一つで、夜中の憂思を叙したもので、眠れずに起き上がって琴をひいていると、薄<sub>レ</sub>帷に月が照り、さわやかな風が襟元を吹き、鳥の鳴く声が聞

えるといい、我ひとり歩きまわって何を見ようとするのか、ただひとり思い悩んで心を痛めるのみだという。

我独抱<sub>レ</sub>深感<sub>一</sub> 不<sub>レ</sub>得<sub>ニ</sub>与<sub>レ</sub>比<sub>一</sub>焉（魏劉公幹「贈<sub>ニ</sub>徐幹<sub>一</sub>」）

親しい友人に贈った長詩の結句で、友を離れてひとり居る身は物に感じやすく、我ひとり深い思いにとざされて、万物と等しくその光に浴することができないと悲しむのである。

撫<sub>レ</sub>枕不<sub>レ</sub>能<sub>レ</sub>寐 振<sub>レ</sub>衣独<sub>レ</sub>長<sub>レ</sub>想（晋陸士衡「赴<sub>レ</sub>洛道中作<sub>一</sub>」）

陸機、あざな士衡は晋の武帝の太康の末に、弟とともに洛陽に入った。故郷を離れて洛陽への旅の道中で作った詩である。山を越え川を渡って遠い旅路に、時には馬をとめて高い巖によりかかり、悲しげに吹く風の音をじつと聴き入り、清らかな露に白に光が宿り、明るい月が輝いているといい、眠れぬままに枕をたたき、衣を整えて独りでいっまでも故郷への思いにふけっているという。

慷慨惟<sub>ニ</sub>平生<sub>一</sub> 俛<sub>レ</sub>仰独<sub>レ</sub>悲<sub>レ</sub>傷（陸士衡「門有車馬客行<sub>一</sub>」）

同じく陸機の「樂府十七首」の一首である。故郷のことを聞いて悲しむさまを叙した。門のところに馬車に乗った人が訪ねて来て故郷の話をするのである。親族・親友の多

くは死去し、人々の生活は変り、城壁は破れ、墳墓も荒れて松柏が生い茂っているという。過去を思つて慨嘆し、俯仰して独り悲しみいたむのである。

家持の「ひとり思ふ」ことの自覚には、これら漢詩文の「独り惆悵して長愁す」「独り悲<sub>ひ</sub>吒<sub>ひ</sub>す」「独り心を傷ましむ」「独り深感を抱く」「独り長く想ふ」「独り悲傷す」などが種になつていたに違いない。

家持の歌にはすぐれた独自の詞句があるが、この他の誰もが思い及ばぬ詞句、他の歌人には歌えない詞句が、実は「漢語」にヒントがあつたということがあつたのではないか。それは言うまでもなく思考、発想そのものにかかわることである。小稿は、それを探るべく、先学の成果によりつつ辿る思考錯誤の一端である。

注1 家持の独自句「春の花」について、その類句「春花」と、「秋の葉」に至る発言は、それを詳細に、そして更に発展させて、「春の花」と「秋の葉」と題して『尾畑喜一郎博士古稀記念 記紀万葉の新研究』（桜楓社、平成四年）に載せた。

2 小島憲之氏「語の性格―万葉語「晚蟬」の場合―」（『美夫君志』第二十三号、昭和五十四年三月）。

3 拙稿「大伴家持の漢詩文」（『和漢比較文学叢書2 上代文

- 学と漢文学』汲古書院、昭和六十一年)に詳説した。
- 4 鉄野昌弘氏「転換期の家持―『臥病』の作をめぐって―」(『日本上代文学論集』塙書房、平成二年)に論じられている。
- 5 小島憲之氏「上代日本文学与中国文学 中」(塙書房、昭和三十九年)「万葉集与中国文学との交流」の章にあり、拙稿(注3)にも付記した。
- 6 小島憲之氏「古今集以前」(塙書房、昭和五十一年)九七―九八ページ。
- 7 同右、一〇〇ページ。
- 8 川口常孝氏「家持覚書―『独』の世界―」は「帝京大学文学部紀要」3(昭和四十六年三月)に発表、「万葉歌人の美学と構造」(桜楓社、昭和四十八年)に再録。
- 9 山本健吉氏「大伴家持」(日本詩人選5、筑摩書房、昭和四十六年)。